

# 神と善悪



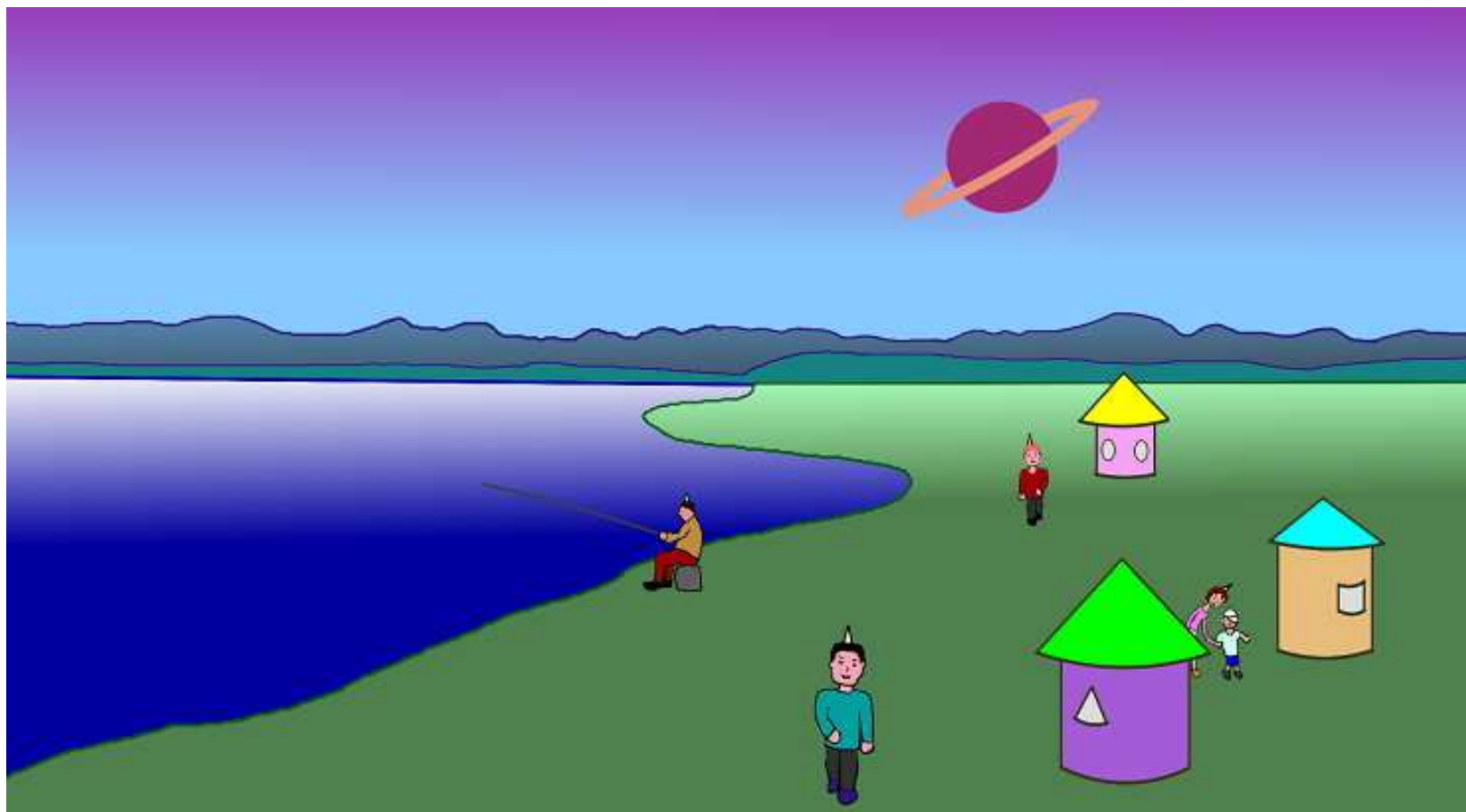
東郷 潤

[注]

この絵本は異星を舞台としたサイエンスフィクションであり、神についてなんらかの主張（神とはこういうものだ、神はいる／いない等）をする意図は有りません。むろんいかなる神への冒瀆を意図したものではありません。

また食のタブーを巡ってストーリーが展開しますが、地球上の特定の文化・宗教の食のタブーについて描くものでもありません。

遠い宇宙のある星に、善悪を何よりも大切にする人々が住んでいます。



彼らにとって、善悪は神様からの命令です。善は「しろ」、悪は「するな」ということです。神様は絶対なので、善悪には絶対に従わなければいけないと彼らは固く信じています。

ある年のことです。

湖の魚に病原菌が増えて、魚を食べた大勢の人が病気になりました。神様は人々のことを心配し、預言者に言いました。預言者というのは、神様の言葉を伝える人のことです。



預言者は人々に神様のお告げを伝えました。



預言者に言われて、人々は魚を食べなくなりました。人々はとても敬虔で信心深く、悪いことをするような人は、ただの一人もいなかったのです。おかげで病気の広がりはいやめられました。みんな大喜びです。

・・・それから、数百年という年月が流れました。今では病原菌もいなくなり、湖の魚を食べても安全です。  
ある年、天候不順で、ひどい飢饉になりました。でも、人々はずっと「魚を食べることは悪いこと」と信じているので、誰一人、魚を口にすることはありません。



その結果、大勢の人が飢え死にしていきました。

それを見た神様は悲しくなりました。人々を愛していたからです。神様は、ふたたび預言者へ話すことに決めました。最初の預言者はもう亡くなっていたので、今度の預言者は別の人です。彼も神様の言葉を聞くことが出来ました。



新しい預言者は人々に伝えました。



そこで人々は、魚をどんどんと食べるようになりました。



中には、魚の獲りすぎを心配する人もいます。



魚の獲りすぎを心配する人は、叱られて口を閉ざしました。

すぐに湖の魚は食べつくされ、ほとんどいなくなっていました。少しずつ計画的に食べていけば、ずっと食べ続けることが出来たのですが・・・



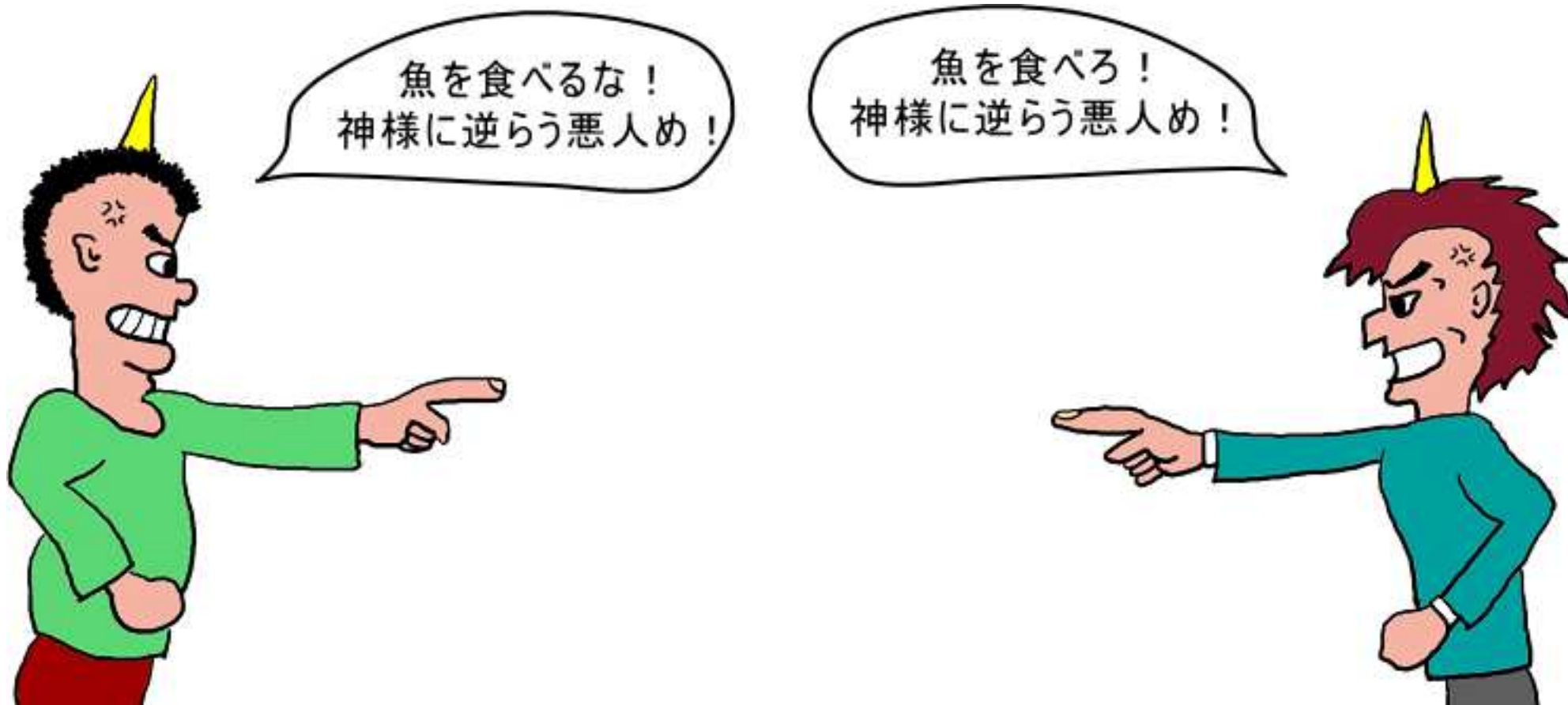
結局、大勢の人が餓死することとなりました。

神様はとても悲しみました。人々を深く愛していたからです。



人々はせっかくの神様の愛を、善悪の錯覚で受け取ることが出来ず、闇の中でもがき苦しんでいるのです。

あれ、どうしたんでしょう？ 人々が争っています。



それぞれ新旧の預言者を信じる人々です。



神様が泣いています。<sup>1</sup>

---

<sup>1</sup> 雨を神様の涙と見立てた比喻表現です。神様を冒瀆する意図は一切ありません。

## あとがき ー絵本「神と善悪」

善悪という考え方／言葉は、本当に様々な錯覚を生み出します。そして、これらの錯覚は人類の長い歴史の中で、多くの悲劇をもたらして来たと考えることが出来ます。（詳細は、下記WEBの絵本集、 弊著「善悪という怪物」をご参照ください）。

もし、あなたがこの絵本に共感されたなら、出来るだけ多くの方に、読ませてあげていただければと思います。本絵本は、自由にコピーして下さい結構です(商業出版はじめ金銭的な授受を伴う場合を除きます)。また下記WEBからは、東郷潤の他の絵本やメッセージをダウンロードすることが出来ます。

[www.j15.org](http://www.j15.org)

©Jun Togo 2012